

## 2012 年度研究会活動の概要

### 言語政策

#### 言語政策研究会

##### 1 研究テーマ

「言語と権力：英語は世界に何をもたらしたか」

*Living Language: An Introduction to Linguistic Anthropology* (Laura M. Ahearn 著、Wiley-Blackwell 出版)を読み進めながら、「言語と権力」「言語と格差」というテーマについて理解を深めるよう努めました。

##### 2 活動内容

###### (1) 月例読書会

工学院大学新宿キャンパスを会場として毎月第3土曜日に行う月例読書会では、上掲書を丹念に読み進めていきました。言語人類学者が立てるリサーチクエスションの特徴、サピア=ウォーフ仮説の現在、多言語状況と社会的ヒエラルキー、言語イデオロギーなどについて書かれた各章を、担当者がレジュメに基づき報告した後、参加者全員によるディスカッションに移りました。

###### (2) 研究発表

読書会と並行して、会員・非会員による研究発表も3回実施しました。新鮮なテーマによる発表を受けて、活発な質疑応答が毎回なされました。

①「戦後沖縄における言語政策：英語教育政策を中心として」（吉井隆宏）

②「1924年出版の書物から見る個人的な日系史：祖父はなぜエリートになれなかったのか」（杉野俊子）

③「ベルベル人、ベルベル語：歴史的視点と現在の問題点」（堀内里香）

##### 3 活動の成果

例会における議論を出発点として、研究会のメンバーが中心となり、『言語と貧困：負の連鎖の中で生きる世界の言語マイノリティ』（明石書店）を8月に刊行しました。

##### 4 今後の活動

月例読書会というスタイルを2013年度も継続していき、上掲書の全章を読破する予定です。また読書会と並行して、「言語と権力」あるいは「言語と格差」というテーマで各メンバーがフィールドワークを実施し、世界各地の現況を調査する予定です。その成果を研究報告書として刊行する予定です。